

# エリザベス・ボウエンにおける幻想と不協和音

——アイルランドとイングランドの狭間で

水之江 郁子

The past is veiled from us by illusion—our own illusion. It is that which we seek. It is not the past but the idea of the past which draws us.

Bowen, *The Mulberry Tree*

## I はじめに

「感性の作家」(a writer of sensibility<sup>1</sup>)として、推敲を重ねた繊細で美しい文章を称えられた小説家エリザベス・ボウエン (Elizabeth Bowen, 1899–1973) は、他方で保守的な上層中流階級の制約を体現する作家として、多くの批判を浴びた。そして、しばしば「20世紀と共に歩んだ」とも形容された彼女は、日本においても相当数の長編・短編が翻訳されたにもかかわらず、特別に注目されるには至っていない。その死後40年近い年月を経て、何故いまボウエンを採り上げるのか？

その40年、女性作家の作品が、女性であるがゆえに注目され、その価値が強調された背景の中で、「フェミニストではない」<sup>2</sup>ことを宣言していた彼女は、決して存在感を示していたとは言えない。しかし、それにもかかわらず、90年代以降数少ないながら着実に研究が積み重ねられ、<sup>3</sup>近年のボウエン再評価の試みに結実してきている。最新のアイルランド研究誌 *The Irish Review* にも、「ここ20年間」<sup>4</sup>という表現でボウエン研究の活況が語られているが、ハーマイオニー・リーは1981年に評伝の出版を志した時、いかに困難に直面したか、いかにボウエンに対する関心が低かったかを再版(1999年)の序文に記している。<sup>5</sup>多くの作家の場合に見られるように、1999年に生誕100年を迎えたことが、さらなる再評価を促す節目となって、現在に繋がったとも言えよう。

さらに、2008年には、彼女が30年間にわたって書き続けたラヴレターのかなりの部分が、*Love's Civil War: Letters and Diaries, 1941–1973*として出版される運びとなった。2009年に入ると、文芸批評において世界的に最も影響力が大きいと思われる書評紙中の二つ *Times Literary Supplement* と *London Review of Books* が揃って同書を採り上げ、ともに長文の解説と批評を試みているが、<sup>6</sup>同書が筆者にとっても新たな関心と呼び覚まされるきっかけとなった。1930年代の一時期恋人であった作家ショーン・オフエイロー



写真1 Elizabeth in Regent's Park, London, 1946.  
How Will the Heart Endure 扉横ページより

ンが、ヴァージニア・ウルフの繊細な美しさに対して、‘handsome’と表現したことで知られるボウエンの堂々として冷たくさえ見える肖像(写真1)に、熱い血がめぐり始めたように感じられたものである。

ボウエンのラブレター…それは、どの評伝にも書き留められながら、いずれにおいても戦争という異常な状況を背景として生じた一時の情事として扱われ、近年に至って最期の時まで続いた友情と記述されるようになった相手、カナダの外交官チャールズ・リッチー(Charles Ritchie, 1906-1995)との間に交わされたものである。二人が会うことのできた時間は短く、1週間と共に過ごしたことはないし、また出会いの頃を除いては年に何回も会えていない。しかし、少なくともボウエンは「唯一人の恋人」への手紙というかたちをとって、日常の些事から文学

論や外交問題まで、あらゆることを話題として書き続けている。

以上のように、新たな側面も加わって、最近活発化しているボウエン研究の中で、この小論が目指すことは、アセンダンシー(Ascendancy)階級、すなわちイギリスからアイルランドへ入植したアングロ・アイリッシュの支配階級という出生から定められた立場が、彼女の考え方・生き方に、したがってその作品に、どのような影響を与えていたかを、再考することである。

## II 残された書簡

エリザベス・ボウエンが40代前半にチャールズ・リッチーと出会い、肺癌で亡くなるまでの30余年間、週に何回か書き綴った手紙はおびただしい数になると思われるが、その全てが残存しているわけではない。第一に、彼女の死後書き手に返還されたリッチーからボウエンに宛てた手紙は、全て破棄されている。第二に、ボウエンの手紙も、その全容が残るわけではなく、リッチーによって処分されたもの、一部が切り捨てられたものも多々ある。すなわち、そこにはリッチーの編集が加わっていることを、出版に際してヴィクトリア・グレンディニングが解説している。<sup>7</sup>

しかし、リッチー側からのメッセージの欠如を補うものとして、彼が書き続けた日記がある。それが手紙に対応する日付を追って挟み込まれていることで、書かれた状況も、二人の間に交わされた内容も、読者に伝わりやすくなっている。ボウエンがリッチーに読まれるために書いたものと、リッチーが自分自身のために書いたものを同時に読み進めると、

時に違和感を覚える状況も生じるが、また時には不思議なほど両者が呼応することを感じさせられるのである。

カナダ外交の黄金時代とされる、後の首相レスター・ピアスン (Lester Pearson) とその盟友たちがカナダ外交を動かしていたころ、若き外交官として頭角をあらわしたのがチャールズ・リッチーであった。彼はノヴァ・スコシアの名家出身で、兄はカナダ最高裁判事となっている。ロンドン、パリ、やがて続くボンには、1954年初めて大使として赴任した。そして1958年には国連のカナダ大使かつ永久代表としてニューヨークへ向かう。国連では安全保障理事会の議長という要職に就き、1962年にはアメリカ合衆国へのカナダ大使となる。NATOやEECの代表、ロンドンにおける英連邦カナダの高等弁務官も歴任する。つまり外交官僚としてはトップの座に登り詰めた人物である。しかし、その多忙な中で克明に日記をつけて、仕事に関する記述を中心に纏めた回想記を出版し、<sup>8</sup>「文筆家」としても知られている。

リッチーとボウエンの出会いは、1941年共通の友人の子供の命名式がロンドン郊外の教会で行われた時であった。当時42歳のボウエンは、すでに作家として名を成し、教育行政の専門家である夫アラン・キャメロン (Alan Cameron, 1893-1952) との結婚生活も18年を経ていた。そしてリッチーとの交際を始める一方、ボウエンはキャメロンの妻であり続け、それはキャメロンが亡くなるまで10年余り続いた。離婚は全く思考の範囲に入らず、悩む対象にもならなかったと言われている。肉体的には結婚が成就していなかったと推測する記述も多いが、二人とも宗教的観点から結婚制度に異議は無く、二人は常に支えあい、尊重しあう存在であったし、亡くなってからは、アイルランドのボウエン宅に隣接する聖コールマン教会 (St Colman's Church, Farahy) 墓地に揃って埋葬されている。墓碑銘には、「私たちは、見えるものによらず、信仰によって歩む」(写真2)と記され、その教会では毎年ボウエンを記念する礼拝が行われて、スピーチの一部は出版もされている。<sup>9</sup>

ボウエンは、夫の勤務地オクスフォード在住時からしばしば文芸サロンの会合をもち、アイザイア・ベルリン、モーリス・パウラ、アイリス・マードック等々錚々たるメンバーを集めて、その中心になっていたし、夫の昇格でロンドンに移り住んでからも文化的に華やかな交際は広がっていた。世に知られたブルームズベリー・グループとも親交を保ちながら一線を画していたのは、あからさまで過激なほど価値があるかのような行動をとったブルームズベリー・グループに対して、ボウエンは活発な会話と社交を大切にしながらも



写真2 Alan Cameron & Elizabeth Bowen 墓碑銘 (2009年 筆者撮影)

「限度を保っていた」という指摘がある。<sup>10</sup> また、後年リッチーの日記に書き残されたボウエンの同グループに対する見解は、彼女自身をよく表していると思えることができよう。

She made me see the ingrowingness of that little Bloomsbury world; their appalling habit of writing endless letters to each other, of analyzing, betraying, mocking, envying each other, of the kind of amusement they had, and the kind of pains of jealousy and treachery which they inflicted on each other…<sup>11</sup>

なお、上記のようなオクスフォード大学関係者と、彼らに連なる知識人たちを友人としていたボウエンであるが、彼女自身は大学教育を受けていない。しかし、作家としての活躍で、プリンストンやペンシルヴェニア、プリンモア等数々のアメリカの大学から講演・講義に、またキャンパス在住作家として、招聘されているし、やがて晩年にはダブリンのトリニティ・カレッジでもオクスフォード大学でも名誉博士号を授与されている。さらに国家の勲章 CBE も受けている。

2008年に‘Love’s Civil War’というタイトルで出版された書には、その名の通り愛し合う男女間の内戦とも言うべき微妙な駆け引きや正面からの感情のぶつかり合いが記録され、さらに、各々の内面における葛藤も書き綴られる。ボウエンは1952年53才の時、夫キャメロンに先立たれ、著作という仕事一筋の生活に向かうが、英米の雑誌<sup>12</sup>への雑文寄稿を含めて経済面の自立に必死であった。背景には、後述するが、アイルランドのコーク近くに所有した先祖代々受け継がれてきた「大きな館」(the Big House<sup>13</sup>)を維持するという経済的重荷があった。一方キャメロンの死の4年前に、「外交官にふさわしい妻」を求めて、又従妹のシルヴィアと「普通の結婚」をしていた7歳年下のリッチーはまだ若く、その‘Civil War’の勝敗はリッチーに分があると見做されていたが、それにもかかわらず、やはりリッチーもボウエンを離れた人生を思い描くことはできなかった。ボウエンに先立たれ、打ちひしがれたリッチーが、ペルメルクラブの便箋に残した走り書きには、いつ何時悲しみの衝撃に襲われるかわからない困惑とともに、自らの死の時まで果てしなく続く起伏のない平原を見ていることが記されている。<sup>14</sup> 特にボウエンの死を悼んで現れる人々を通して、初めて知る彼女の世界の大きさに圧倒され、日記は、そして同書は、以下のような言葉で閉じられる。

I need to know again from her that I was her life. I would give anything I have to give to talk to her again, just for an hour. If she ever thought that she loved me more than I did her, she is revenged.<sup>15</sup>

もっとも、彼の生活には、妻とボウエン以外にも、他の女性たちの姿が常に見え隠れしており、この言葉が真に30年間を纏める言葉であるとは受けとめ難い。前述した *The Irish Review* の論文は、深くのめり込んでいたのは明らかにボウエンであると結論づけている。<sup>16</sup> あるいは、もっと単純に、愛に対する男性と女性の感じ方、考え方、そして行動の相違が、如実に現れているとみることができるとも思える。

同書を、このような男女の関係の記録として読むとき、そこには誰にも訴える力を持つ「愛の世界」<sup>17</sup>が繰り広げられているが、同時に30年の歳月の流れを忘れさせる繰り返しによって、<sup>18</sup>どこを開いても同じような印象を与える部分が構成されていることに気付く。しかし、二人の関係は、第二次世界大戦中の大空襲を受けるロンドンから、戦後の問題を山ほど抱えた社会へと移り変わって行く現実の中で、展開されたのである。ボウエンはその激動の社会とどのように関わり、どのような影響を受けたのか、リッチーとの関係から何を読み取れるのであろうか。

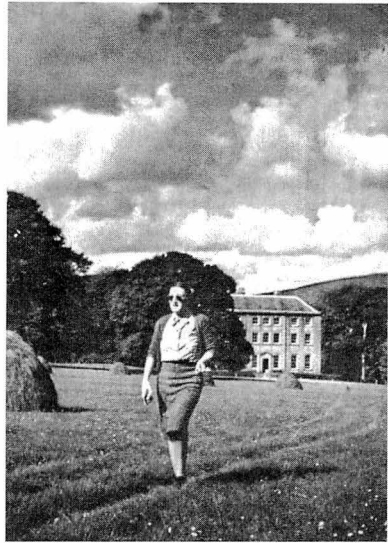


写真3 Elizabeth at Bowen's Court  
Bowen's Court 扉裏ページより

### Ⅲ ボウエンとアイルランド その1

夕陽があたりの風景を溶かして、やがて全てのものが「火とガラス」で作られているかに見えるころ、新鮮な匂いを立ちのぼらせる干草の山々、むこうの丘陵には誰も足を踏み入れたことのない森林とその木々の間を包み込む黄金色が、天上の世界へ思いを向かわせる…そんな光景の中を女がただ一人、後部座席にコートを投げ入れて、ファミリーカーを走らせている。子供たちをベッドに寝かしつけ、夫と伯母を置いて出てきた彼女は、時々腕時計に目をやりながら、スピードを上げる……エリザベス・ボウエンの世界を凝縮したような短編小説「夏の夜」(“Summer Night”)の冒頭であるが、その光景はアイルランド・コークの北方、ミチェルスタウンとマロウの間の地、彼女が7歳までの幼少期を過ごし、その後長じて、ボウエン家のただ一人の跡継ぎとして所有者となったボウエンズ・コート (Bowen's Court) (写真3) があった辺りを活写している。ボウエン自身も、この冒頭の描写を「揺るぎようもなくコーク州」(unshakably County Cork) であるとし、同時にそれら短編小説が自身の作品群の中で芸術的に最も納得のいくものであると述べていた。<sup>19</sup>

皮肉にも、そのすぐ近くには、エリザベス朝の大詩人エドマンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552-1599) が、女王の命を受けてアイルランド統治を一層強固にすべく派遣された際の城跡があり、「スペンサーの塔」(Spenser's Tower) が今もポツンと残っている。美しい宮廷恋愛詩で名を残すスペンサーが、『妖精の女王』(*The Faerie Queene*) の一部のみならず、アーサー・グレイ総督の下で、いかにアイルランドを支配下に置くかという政策を提示、権力や富への渴望をあからさまに表現した「アイルランドの現状に関する一見解」<sup>20</sup> という問題の文書を書き綴った地でもあるのだ。

ボウエン家は、エリザベス朝まで遡るわけではないが、イギリスのアイルランド支配に

において、最も深い傷跡を残したとされるオリバー・クロムウェル<sup>21</sup>の時代に、アイルランド征服の功績で土地を得た家柄である。もともとはウェールズの名家であったという。そして、ボウエンズ・コートが建てられたのは、アイルランドの「大きな館」最盛期とされる18世紀であった。ボウエンは、長い一族の歴史と、館の建築、さらに内装や家具、そこにおける生活様式も描きこんだ大作 *Bowen's Court* を残しているが、そこでは祖先の功績とされることが、実は好ましくない行為であったこと、その館を存在に至らせた暴虐が、美しく均整のとれた建築で覆い隠されていることを率直に認めつつ、やがては消えゆく運命にあるアセンダンス階級というアングロ・アイリッシュの生活と文化をいとおしみ、ユーモア豊かに描出している。20世紀初期、次々と焼き討ちに会う「大きな館」の運命を全身で受けとめていたとも思われる。

エリザベス・ボウエンの生まれは、法廷弁護士であった父の職場があるダブリンであったが、その後まもなくボウエンズ・コートに移り住み、典型的な「大きな館」の生活を体験する。しかし、7才の時、父は神経衰弱が高じて入院することになり、医師の勧めに応じて、母方の一族が住むイングランド南東部のケント州ハイス (Hythe) に母とともに移り住むことになる。母の愛を一身に受けて、感受性の強い、賢い子として成長するが、13才で最愛の母を病に奪われる。その後は母方の、ボウエンが 'a committee of aunts' と名づけた叔母たちに世話をされ、その間には病の回復によって再婚をした父のもとに送られて過ごす時期があり、その頃からアイルランドとイングランドを何回も往復することになる。学校教育はイングランドの寄宿学校で受けるが、読書を通してアイルランド文学に強く影響された。

この時期が、ボウエンのその後の生活や作品執筆に影響を与えたこととして、二点が特筆される。第一に、何事も「気付かない振りをして、やり過ぎそうとすること」(campaign of not noticing<sup>22</sup>) であり、父の病による家庭内のつらい体験がもとになっている。次に、そのことによって導き出される「蓋をした生活」(life with the lid on<sup>23</sup>) で、何事かによって、その蓋が外れた時に、その生活に裂け目ができる時に、真実が現れ出てくるという。ボウエン作品はその観点から解釈されることが多い。

寄宿学校時代から級友たちとともに、「まず結婚をしなれば、落ち着いて他のことに取り組むこともできない」<sup>24</sup> と考えたボウエンは、24才で念願の結婚生活に入り、イングランド人の夫キャメロンとともに、ノーサンプトン、オクスフォード、ロンドンと居を移すが、1年のうちの一定期間はボウエンズ・コートで過ごしていた。それでも夫の仕事があるうちは、イングランドでの生活が中心であったが、夫が心臓発作で回復も危ぶまれてからは、二人でボウエンズ・コートに移り住み、空襲にあったロンドンの自宅を手放している。ボウエンも書き記した通り、「大きな館」は、国外の基準では必ずしも大きいわけではなかったが、<sup>25</sup> それでもそこにおける伝統的な生活と文化を維持するのは、多大な経済的負担を意味していた。

やがて夫の死によって、また社会の変化によって、ボウエンズ・コートはますます困難となり、1959年60歳の時、ついに不可避の現実に向き合うこととなる。1960年彼女は最後にその地を訪問し、最初に購入を申し入れた地元のアイランド人に売り渡した。買手は、館に住み込んで保存するという約束に反して、1年も経たないうちに館を完全に粉砕し、そこはただの更地に戻った。しかし、ボウエンは毅然として、その最後を「廃墟にならずに、さっぱりと終わった」と書き記したのである。

It was a clean end. Bowen's Court never lived to be a ruin.<sup>26</sup>

ロイ・フォスターは、その地についての記述である *Bowen's Court* の執筆を、まさに「ピエタの行為」であり「追懐の行為」であると強調している。<sup>27</sup> その後もボウエンは、友人の館を訪問したり、死の直前にもアイランドへ足を運んだりしているように、二つの国を行き来し続けた。

なお、彼女は、アイランド・イギリス間の往復だけでなく、ブリティッシュ・カウンシルの文化使節として、鉄のカーテン時代の東欧へも講演旅行をした。ハンガリーやチェコの人々と接する仕事を、喜びをもってこなしている様子が、リッチーへの手紙にも記されている。さらに、雑誌への寄稿や小説の出版によって人気を得たアメリカ合衆国へは何回も招聘され、ニューヨークを初めとしたさまざまな都市で時を過ごした。特に、リッチーがオタワにいる時は、モントリオールまで飛んだり、リッチーがニューヨーク滞在となれば、何度かその地へ向かったりしている。そして、彼女の作品の多くに「旅する人」が描かれ、「到着」と「旅立ち」の場面が重要な役割を担っているのである。<sup>28</sup>

#### IV ボウエンとアイランド その2

第一次世界大戦時と同様に、第二次世界大戦においてもアイランドは、デ・ヴァレラに率いられて中立を宣言した。その人々の本心は、一体どこにあるのか？ アイランドにも館を所有するボウエンは、アイランド人として入国が容易であることを利用して、頻繁にアイランドへ赴き、イギリス情報局 (Ministry of Information) のスパイ活動にかかわっていた。そして、尊敬するウィンストン・チャーチル宛の報告書を幾度となく提出している。文学的な重要性は疑わしいとしても、ボウエン自身はこの仕事に相当な重きを置き、執筆に力を入れていた。一方、それらを受け取ったチャーチルや戦時政府も、参考資料にしたと言われる。<sup>29</sup> 特にアイランド南部・西部の港をイギリス軍が利用できるかという問題が浮上していた。<sup>30</sup> また、ボウエンは、アイランド人が戦争に巻き込まれることをいかに恐れているかを説いていて、没後 *The Irish Times* が彼女の記事を引用している。<sup>31</sup> 1945年のリッチーへの手紙には、世界平和を100%喜んで元気なのはアイランド人だけではないか、と述べてもいる。<sup>32</sup>

当時一般的にはイギリス・アイランド間の旅行が禁じられて、アイランドでは田舎

はもとよりダブリンでも、人々がイングランドの状況、イングランドの意図、考え方等を理解せず、危険な誤解や噂が増えつつあった。その中で、ボウエンは努めてさまざまな人々と触れ合い、イングランド人のアイルランドに対する善意を明らかにすべきであると主張する。<sup>33</sup> 著名な政治家や作家、爵位を持つ人々だけでなく、電車、カフェ、ホテルのラウンジ等で会う人々、テニスクラブの試合を見物する人々を対象に、彼女は話しかける。イングランドがアイルランドの中立を尊重しないのではないかと、という疑念は危険だ、イングランドはアイルランドに派兵の意図がないことを明示すべきであると、ボウエンは繰り返し力説する。失った北6州を取り戻すためにもドイツの力を借りたいとする考え方は、若い人々にみられるものの、それほど強力なものではない、イングランドの意図や態度に対する不安や誤解の方がはるかに危険であるとも述べている。しかし、アングロ・アイリッシュの人々に対しては、アイルランド人と運命を共にしようとせず、イングランド側に身を寄せようとする態度を批判している。<sup>34</sup> なお、ボウエンはいつも‘England’と言い、イギリスすなわち‘Britain’あるいは‘UK’という感覚はなかったと思われるし、リッチーへの手紙にはスコットランドに対する驚くほどの偏見を表している。<sup>35</sup>

同報告書で、当時ダブリン市長であったクラーク女史<sup>36</sup>について、ボウエンは強い反感を示す。対立候補無しで当選した彼女を、次のように描写する。

Mrs. Clarke. A fanatical elderly woman of whom someone said to me “She has not thought since 1916.” … I have met no one, so far, with whom Mrs Clarke is popular. It is felt she uses the Mansion House for her own purposes, and some of her activities ought to be checked.<sup>37</sup>

この箇所は、女性市長としての活躍を伝えられるクラーク女史に対する評価が妥当か否かは別として、リッチーに宛てた書簡に記された「高尚な女性たち」に関するボウエンのコメントを思い出させる。自信と満足感に溢れる女性の大学教授たちが、人々の友であると言いながら、人々に対して全く無感覚であることを、ボウエンは感じ取る。<sup>38</sup> それに加えて、政治的には穏健な保守派を貫く彼女に、イースター蜂起以降の戦乱を肯定する女性への激しい嫌悪感が現われていても不思議ではない。

以上のように、二つの国を行き来したボウエンであるが、どちらにも完全には溶け込めない部分があった。どちらに対してもアウトサイダーで、リッチーと同様にイングランドの上流社会に出入りしながら、一方で二人はカナダとアイルランドという植民地意識を共有し、距離を置いて観察する立場をとる。しかし、そのような状況にあって、ボウエンはそこへ来る人々を取り込んでしまうアイルランドという土地の魅力を見出していた。“Ireland Makes Irish”と題した短文は、「この小さな活気ある国に住み着いて、その国のものとならないことは不可能」とさえ言っている。何世紀にも亘って、訪れる人々を惹きつけ、定住する人々のうちに火を灯し、彼らを自分たちの複製 (replicas of her own) にしてしまう……歴史を振り返り、ストロングボウに始まり、エリザベス朝の人々やクロムウェル



軍と共に来た征服者たち、彼らは結局アイルランドに留まって、土地を所有し、アイルランドを自らの国として愛することになったではないか。

No country, probably, has taken a sweeter or by the end more gentle revenge upon its invaders.<sup>39</sup>

まさにこの言葉この随想こそ、ボウエンのアイルランド観を、端的に示していると言えよう。

## V 『最後の9月』 (*The Last September*)

実社会におけるボウエンのアイルランドとの関係が、作品に反映されたものは少なくないが、ここでは初期の作品でありながら、完成度の高いことで知られる『最後の9月』 (*The Last September*) について、多少の考察を加えてみたい。ボウエンが「最も自分の心に近い作品」(nearest my heart) と述べたことは、よく知られている。

舞台は、コークに近い「大きな館」ダニエルスタウン (Danielstown) である。ボウエンが一族の年代記 *Bowen's Court* に記したボウエンズ・コートそのまま、館の主ネイラー一家 (the Naylor) も、同じくアングロ・アイリッシュである。彼らは、長くアイルランドに暮らす中で、アイルランドを理解し、アイルランド人を友に持つ。そして、イングランドからの友人の自信過剰、傲慢さに傷つきながら、しかし、それを表に出すことはできない。また、一方で、理解し合っているつもりのアイルランド人からは、両者の間にくっきりと境界線が引かれていることを思い知らされる。イングランド人に対しても、アイルランド人に対しても、細かい神経を使い、どちらにも心底から心を許すことができず、曖昧な態度を取らざるを得ない。イングランド人はもっと歴史を心に留め、アイルランド人はもっと歴史を忘れられればよいのに…とボウエン自身も嘆いている。<sup>40</sup>

無邪気な少女と大人の女性の間を揺れ動く主人公ロイス (Lois) は、館の主の姪としてダニエルスタウンに滞在しているが、常になにか充たされない思いを抱えている。この館とそこでの生活の美しさに惹かれながらも、同時に違和感を拭い去れない。跡継ぎではなく姪であるために、少し距離を置いて斜に構えることが許されたのかもしれない。彼女はイングランド人兵士ジェラルド (Gerald) に胸をときめかすが、まだ恋に恋したに過ぎないことが次第にわかってくる。そして彼は、アイルランド人の待ち伏せによる銃弾で、敢え無く死亡し、別離が揺るがぬものとなる。それまでに高まっていた二人に対する周囲の心配は、アングロ・アイリッシュの人々のイングランド人への不信感を露呈していた。伝統や現実の利益から考えれば、イングランドに身を預けることが自然に思われるが、それができないネイラー夫妻の言動がユーモアをもって描かれている。同時に、ロイスはジェラルドを「好き」であると信じて婚約までしたものの、彼女を包む状況を本当には理解していなかったことも明らかになる。

Why was Lois, at her romantic age, not more harrowed or stirred by the national struggle around her? In part, would not this be self-defence? And world war had shadowed her school days: *that* was enough—now she wanted order.<sup>41</sup>

まだ一人立ちできない若い女性を、暖かく見守る作者ボウエンの言葉である。また、この二人の関係は、アイルランドとイギリスの関係を象徴するとも解釈できる。まだ独立国として自立するに至っていないアイルランドを、自意識が強く、自らのアイデンティティを確立しようと懸命な若いロイスに託し、一方ジェラルドはイングランド人の典型を示している。ロイスは言う。

Gerald is so matter of fact. Nothing could make him into a tragedy.<sup>42</sup>

ところが、皮肉にも、銃弾は一瞬にして彼を、「高邁な大義のために命を落とした英雄」にしてしまう。誰も内心そんなことを本当には信じていないながらも、戦争は戦死者を英雄に祭り上げ、死を美化しようとする。醒めた理性による一種の風習喜劇的な趣きと、繊細な情感を織り込んだ不思議な作品となっている。

時は1920年という混乱の時代、アイルランド独立戦争 (the Irish War of Independence<sup>43</sup>) というゲリラ戦の真只中である。派遣されたイギリス兵たち<sup>44</sup> はジェラルドも含めて、普段はアセンダンシーの館でテニスやダンスに加わることもしばしばであった。そして、思わぬところに狙撃兵が潜んでいる。この状況を舞台として、多くの作家たちが長編・短編小説を創作しているが、この時期の「大きな館」をこれほどまでに鮮やかに描き出し、アイルランド人、イングランド人、その狭間に立つアングロ・アイリッシュと呼ばれる人々を、各々その関係の中で、とくにその微妙な男女間の会話、動作などを通して表現し切っている作品は、決して多くはないであろう。

例えば、この作品では、ネイラー家を何年ぶりで訪問するモンモランシー夫妻 (the Montmorencys) を初めとして、誰もがこの館との関係、その思い出を強調する。そこにアイデンティティを見出そうとするかのように、現実の場所としてよりも「思い出の地」となっていることがわかる。記憶の中に存在して思い出される場所は、現実のように変化をしない。しかし、実は変化している館やそのあり方を、各自が気付いていく。ロイスにとって、ヒューゴ (Hugo) は、かつて母ローラ (Laura) が結ばれたかもしれない男性と知りつつ、その魅力に抗えない。一方、ヒューゴは10歳年上の病弱な妻フランシー (Francie) をいたわりながらも、イングランドの婚約者との結婚を間近に控えた訪問客マーダ (Marda) に激しく惹きつけられる。彼にはローラとの過去が無かったかのような、思い違いであったかのような気がしてくる。ヒューゴの意識の中で過去が塗り替えられていく。フランシーも決して口には出さないが、二人の関係に気付かないはずはない。敬愛するジェイン・オースティンと同様に、冷徹な目で人間観察をしながら、的確な言葉の選択で、人生の哀しみや可笑しさ、アイロニーを決して過激にならずに纏めていくボウエンは、常に「土地に対する感覚」 (a sense of place) に鋭敏であったと言われるが、ここで

はダニエルスタウンを軸としてストーリーを展開させていく。

また、土地に根ざした生活をするアセンダンシーは、土地を離れることのないアイルランド人と共通するところがあり、イングランド人の浮遊する生活を肯定できない。ジェラルドの否定的要素の一つは、「家」や「家族」という背景が読めず、「個人」しか見えない点である。彼にも親族はいるが、皆ばらばらに散って暮らしている。<sup>45</sup>

ヒューゴの激情に気付いて動揺するマーダは、滞在を切り上げてイングランドへと向かう。ヒューゴとマーダとの関係を知ったロイスも、一回り大人になってフランスへ旅立つ。<sup>46</sup>残されたダニエルスタウンは、近隣の二つの「大きな館」とともに、ある夜アイルランドの暴徒の焼き討ちにあい、崩壊した。この時期の多くの館と運命を共にしたのである。それはアセンダンシーの館の「死」であり、一つの時代の終焉であると同時に、地元のアイルランド人によるアセンダンシーに対する「処刑」(execution)でもあったのだ。<sup>47</sup>

この作品の時代背景が1920年で、ボウエンが執筆に当たったのは1928年、出版は翌1929年である。そして、執筆時のボウエンは既に作家として認められ、夫と共に「別世界」オクスフォードでの生活を満喫しながら、1920年のアイルランドを振り返っているわけである。その8年という時の経過は、ボウエン個人の人生においてのみならず、アイルランド社会に関しても、大きな変化をもたらした。ゲリラ戦は1922年のイギリス・アイルランド条約によって終結し、国土が分割された。その条件を巡ってアイルランド史上最悪の内戦となり、イギリスに残った北6州が「北アイルランド問題」(the Troubles)の発端となる。

1920年代末には、事実上終焉を迎えていた「大きな館」の生活は、しかしながら、その後北アイルランド問題の激化と共に、小説の中に再登場する。ウィリアム・トレヴァー、ジョン・バンヴィル、ジェニファー・ジョンストン等々の作品に“the Big House Novels”の流れを見出すジョウ・クリアーは、次のように指摘する。

…the twentieth-century version acquired a more elegiac Chekhovian cadence: a rueful emphasis on the grace of a lost civilization tending to soften memories, sometimes to the point of willed amnesia, of the violent monopoly of power that sustained the Ascendancy world.<sup>48</sup>

ボウエンの描き出した世界は、アセンダンシーの最後を見据えながら、まだ過去の華やきを肌で体験した感覚を残している。同時に、ヒューゴに代表されるような過去の忘却—そこには、無意識にせよ、捨て去ろうとする思いが働いていることが読み取れるが—それが、世界を次第に覆っていくことが暗示されている。そう考えれば、ボウエンを、続く“the Big House Novels”第二世代への先駆けとも見做しうるであろうか。

## VI おわりに

その後、ボウエンがリッチーに、執筆にかつてないほど苦闘したことを打ち明け、<sup>49</sup> かつ “To Charles Ritchie” という献辞を記した『日ざかり』(*The Heat of the Day*) では、戦時下のロンドンを舞台に、階級や世代間の流動性を増した社会が描かれ、その境界を越えて生きる男女の愛や裏切りがテーマとなるが、主人公ステラとロバートの関係は、ボウエンとリッチーの関係から生み出されたと言われる。<sup>50</sup> 死の恐怖に直面したロンドンには、あらゆる規範や束縛からの解放があった。その中でステラは、階級的に性的に解放された生き方を示すが、ステラが生きる方向を見出す鍵となる役割を与えられるのが、アイルランドの「大きな館」マウント・モリスである。

続く『愛の世界』(*A World of Love*) では、再び中心にアイルランドの「大きな館」が置かれている。それは、「まだ住んでいる人がいるとは思わなかった」と驚かれるほど、近隣のアイルランド社会にも存在を忘れ去られた、孤立して隔離された場となっている。『最後の9月』よりも一層過去の産物となった世界で、そこに最も存在感を示すのは死者ガイ (Guy) である。彼の周囲の人々それぞれの思い出に生きる彼が、最後に否定されるまで、誰もの意識を支配して、過去の亡霊に付きまといられるアセンダムシー末裔の世界が繰り広げられる。リッチーはその日記に、これこそ彼女がその力量を出し切って執筆した傑作であり、「我々が共に抱く人生に対する幻想」(our shared illusion of life) を表現していると認め、自分がいなくては書けなかった作品であると、高揚した気持ちを隠し切れないように記している。<sup>51</sup>

ボウエンの手紙に示されるのは、リッチーへの一貫した愛と信頼であり、その点での揺らぎはみられない。一方、リッチーの日記は、比較的冷静な出会いの描写から始まり、ボウエンとの関係に対しても、自らの結婚やその後の生活に対しても、複雑になっていくに連れ、さまざまに思い乱れ、逡巡する心のうちを記録する。多忙を極める公的な生活の背後で、信じ難いほど迷いの多い私生活が営まれていた。しかしながら、一つだけ確固として動かないことが見出される。それは、ボウエンの仕事振りを称え、その作品を愛する態度である。二人だけでボウエンズ・コートで過ごす短い時間の中でも、ボウエンは一定時間机に向かって筆を走らせる。その行為に対して敬意をもって見守るリッチーは、「感情の問題」を話し尽くそうとして過ごした時間を悔い、「もっと面白いことを話すべき」と悟るのであるが、それに続けて、彼はボウエンのことを「この世代を代表する知性の一人」(one of the minds of the generation<sup>52</sup>) であると書きつけている。

ジェイン・オースティンを範として、「荒々しさ」も知った上で「抑制」を学びたいと述べた<sup>53</sup> ボウエンは、感情を正確に描写するたった一つの方法は、「激情に駆られない控えめな表現」(dispassionate understatement<sup>54</sup>) であると言うが、手紙では時に陳腐な表

現に陥るほど、飾り気なく、思うままを綴っている。「アングロ・アイリッシュという階級に属することは、何て得なのでしょう、無の中に立場を維持する術を身につけられるのだから…」<sup>55</sup>という言葉は、近年の「無」という観点からボウエンとベケットを比較する研究にも資する深さを感じさせるが、自発的に参戦したアングロ・アイリッシュとカナダの兵士たちを誇らしく一纏めにしてみたり、ダブリンの秩序正しさに対して、ロンドンを粗暴で卑俗で雑然としていると言ってみたり…推敲を重ねた作品中には決して見出せないであろう表現も少なくない。

そのボウエンが紡ぎだした作品の数々に通底することとして、几帳面な描写や端正な記述の中に、不思議なほど唐突な不協和音が聞こえてくることを挙げ得るであろうか。軽いユーモアにも緊迫した光景の中にも、なぜか感じられるのが読み手の心を動揺させる「乱れ」のようなものである。それは、蓋を外してしまった時に見えてくる真実と関係しているのかもしれない。アングロ・アイリッシュらしく現実に対して無頓着な振りをして、幻想を優雅に生きる中で、急に襲ってくる孤独や焦燥なのであろうか。ボウエン自身も、リッチーに対して、もったいぶった評価を下す批評家たちが、彼女の作品にある「粗野な、ある意味でみだらな (something coarse, in a way vulgar) 部分」を読み落としている、と不満をもらしている。<sup>56</sup>

エリザベス・ボウエンを、同時代のレベッカ・ウエストやアイヴィ・コンプトン＝パーネットなどと共に、「古典的リアリズムとモダニスト的実験主義の境界に漂う」作家であると、モード・エルマンは研究書の冒頭で位置づけている。<sup>57</sup>文学史的にみると、そのような表現に落ち着くのもかもしれない。そして、ボウエンの場合、アングロ・アイリッシュであるという運命に定められた「境界を漂う」経験が、さまざまな作品の背後に、周囲に、ときには前面に影響を与えていることを否定できないであろう。自らが拠って立つ場であったボウエンズ・コートが無に帰して、それ收にかえて今もその館が象徴していた世界に生きることができると語ったボウエンは、<sup>58</sup>激動の20世紀前半から中頃を一見優雅に生き抜きながら、何かの瞬間に幻想を突き破って見えてしまう現実を認めて、『最後の9月』のネイラー夫人と同じように、内心動揺し傷ついていたのではないか。

さらに、エルマンは上記に続けて、ヴァージニア・ウルフ、E. M. フォースター、グレアム・グリーンなど同時代作家たちに比して、ボウエンの作品が「倫理的に、心理的に、文体的に、常に我々の分類を超える」ことを指摘しているが、作品だけでなく、ボウエンが最も素直に自らの心のうちを吐露した書簡にも、分類を超えて多様な側面が渾然として見出され、しかもそこにもその調和を破る不協和音が不意に響くことがあり、読み手を掴んで離さない。そしてその背後には、実生活における一國と國との、あるいは私生活上の一境界、否、挟間を、凜として歩んでいくボウエンの姿が浮かび上がってくるのである。

\* 本論は、平成 19-22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) [課題番号 19520256] の研究

成果の一部である。平成20年10月Royal Irish Academyの学会“The Big House in Twentieth Century Irish Writing”に参加できたことを、併せて感謝したい。



Elizabeth Bowen (1939, Bassano 撮影)  
National Portrait Gallery 所収

〈注〉

- 1 この表現を最初に使ったのは、1951年出版Jocelyn Brooke, *Elizabeth Bowen* であると言われるが、その後ボウエン批評に類出する。
- 2 Elizabeth Bowen, “Woman’s Place in the Affairs of Man,” *People, Places, Things: Essays by Elizabeth Bowen* (ed. by Allan Hepburn), p. 378.
- 3 *The Bowen Newsletter* (ed. by Andrew Bennett & Nicholas Royle) も、1992年冬に創刊 (Vol. 1, No. 1) され、ボウエン研究の先駆的な役割を担ったが、1995–96年版 (Vol. 3) まで6冊で廃刊となり、90年代前半はまだ緩やかな動きであった。
- 4 Ian D’Alton, “Courting Elizabeth Bowen,” *The Irish Review*, Summer 2010, p. 128.
- 5 Hermione Lee, *Elizabeth Bowen*, p. 2.
- 6 Clair Wills, “In the Fabric,” *Times Literary Supplement*, 3 July 2009, & Rosemary Hill, “Written out of Revenge,” *London Review of Books*, 9 April 2009.
- 7 *Love’s Civil War*, p. 9.
- 8 *The Siren Years: Undiplomatic Diaries 1937–1945* (Macmillan, 1974), *Diplomatic Passport: More Undiplomatic Diaries 1946–1962* (Macmillan, 1981), *Storm Signals, 1962–1971* (Macmillan, 1983).
- 9 Eibhear Walshe (ed.), *Elizabeth Bowen Remembered: The Farahy Addresses*, Four Courts Press, 1998.
- 10 Victoria Glendinning, *Elizabeth Bowen*, p. 78.
- 11 *Love’s Civil War*, p. 445.
- 12 *the New Statesman, the Tatler, the Spectator, the Listener, the Observer, Vogue, Harper’s Bazaar, Horizon, Mademoiselle, Night and Day, Homes and Gardens, House and Garden, Holiday, the London Magazine, Eve, Woman’s Day* 等々多数の雑誌に寄稿。
- 13 イギリスからアイルランドへ12世紀以降、征服や侵略によって入植した人々の邸宅で、18世紀には独特の文化が開花する。その館を所有する支配階級を Ascendancy という。
- 14 “Coda,” *Love’s Civil War*, p. 468.
- 15 “19 December 1973,” *Love’s Civil War*, p. 475.

- 16 D'Alton, *op.cit.*, p. 134.
- 17 ボウエンの後期小説のタイトルであり、著名なアイルランド系カナダ作家 Jane Urquhart が本書をまとめて用いた言葉でもある。
- 18 編集ノートは、多くのラヴレターに見られるような繰り返しは、大幅に削除したことを告げているが、それでも愛を伝える言葉は繰り返される。*Love's Civil War*, pp. 16-17.
- 19 Eibhear Walshe, *Elizabeth Bowen Remembered*, p. 9.
- 20 Edmund Spenser, *A View of the Present State of Ireland*, 1596, published in 1633.
- 21 'A curse of Cromwell on you!' という呪いが、アイルランド人にとって最も恐ろしい言葉であったと、長編詩 *Cromwell* の著者である詩人・TCD 教授 Brendan Kennelly は語っている。(2008年10月 TCD にて面談)
- 22 Glendinning, *op.cit.*, p. 26.
- 23 *Ibid.*, p. 82.
- 24 Elizabeth Bowen, "The Mulberry Tree," *Collected Impressions*, p. 189.
- 25 Elizabeth Bowen, "The Big House," *Collected Impressions*, p. 196.
- 26 Elizabeth Bowen, *Bowen's Court*, p. 459.
- 27 Roy Foster, "Irish and Regional: Locale in Elizabeth Bowen's Writing," *Elizabeth Bowen Remembered*, pp. 23-24, & *Luck & the Irish*, p. 150.
- 28 Glendinning, *op.cit.*, p. 135.
- 29 Jack Lane et al., *Elizabeth Bowen: More of her espionage reports from Ireland to Winston Churchill*, Aubane Historical Society, 2009, pp. 32-34. このパンフレットを作成した組織に対しては、フォスター等歴史学者から強い批判が向けられているが、ボウエン執筆報告書の要旨を窺い知ることではできると思われる。
- 30 *Love's Civil War*, p. 25.
- 31 *The Irish Times*, March 24, 1975, quoted in Glendinning, *op.cit.*, p. 203.
- 32 *Love's Civil War*, p. 57.
- 33 Jack Lane et al., *op.cit.* 30 ページほどの小冊子にボウエンの報告が纏められている。
- 34 Glendinning, *op.cit.*, p. 203.
- 35 *Love's Civil War*, p. 165 & p. 167.
- 36 イースター蜂起首謀者の1人として処刑された Tom Clarke の妻 Kathleen Clarke.
- 37 Bowen, "Notes on Eire," in Lane, *op.cit.*, p. 11.
- 38 *Love's Civil War*, p. 176.
- 39 Elizabeth Bowen, "Ireland Makes Irish," *People, Places, Things*, p. 155.
- 40 Robert Fisk, *In Time of War*, quoted in Hermione Lee, *op.cit.*, p. 8.
- 41 Elizabeth Bowen, "Preface to *The Last September*" (1962), quoted in "Foreword" by Spencer Curtis Brown in Bowen, *Pictures and Conversations*, p. xxix.
- 42 Elizabeth Bowen, *The Last September* (ed. by Glendinning), p. 66.
- 43 この戦争に対するイギリス側の名称は異なり、Anglo-Irish War となる。
- 44 The Black and Tans と呼ばれる、アイルランドの反乱鎮圧にイギリス政府が派遣した警備隊で、柄の悪い下級兵士が多かったことで知られるが、ボウエンは彼らよりも将校やその妻たちを揶揄している。
- 45 Elizabeth Bowen, *The Last September* (ed. by Glendinning), p. 178.
- 46 多くのアイルランド作家がフランスへの思い入れを表現してきたが、ボウエンも独特の熱い感情を大陸に対して、特にフランスに対して、随筆や手紙に表している。
- 47 *The Last September.*, p. 206.
- 48 Joe Cleary, "Postcolonial Ireland," *Ireland and British Empire*, p. 271.

- 49 *Love's Civil War*, pp. 88 – 89, & 112 – 113.  
 50 *Ibid.*, p. 124, note 135.  
 51 *Ibid.*, pp. 198 – 199.  
 52 *Ibid.*, p. 197.  
 53 Bowen, "What Jane Austen Means to Me," *People, Places, Things*, p. 230. *LCW*にも作家は 'elegant or cosy' でなければならないが, Austenは両方を兼ね備えていると述べている (p. 86).  
 54 *Elizabeth Bowen's Irish Stories* (ed. by Glendinning), p. 7.  
 55 *Love's Civil War*, p. 54.  
 56 *Ibid.*, p. 229.  
 57 Maud Ellmann, *Elizabeth Bowen: the Shadow Across the Page*, p. x.  
 58 *Bowen's Court*, p. 457.

#### 参考文献

##### \* エリザベス・ボウエン著作

- The Hotel*, Jonathan Cape, (1927), 1981.  
*The Last September*, Vintage, (1929), 1998.  
*The House in Paris*, Alfred A. Knopf, 1936.  
*Bowen's Court*, The Ecco Press, (1942, 1964), 1979.  
*The Heat of the Day*, Jonathan Cape, (1949), 1982.  
*Collected Impressions*, Alfred A Knopf, 1950.  
*The Shelbourne*, Vintage, (1951), 2001.  
*A World of Love*, Jonathan Cape, 1955.  
*The Little Girls*, Anchor Books, (1963), 2004.  
*Pictures and Conversations: Chapters of an Autobiography with Other Collected Writings*,  
 Alfred A. Knopf, 1975.  
*Love's Civil War: Letters and Diaries* (ed. by Victoria Glendinning), McClelland & Stewart, 2008.  
*Elizabeth Bowen's Irish Stories* (ed. by Victoria Glendinning), Poolbeg, (1978), 1996.  
*People, Places, Things: Essays by Elizabeth Bowen* (ed. by Allan Hepburn), Edinburgh UP, 2008.

##### \* ボウエン関連研究書

- Allen, Nicholas, *Modernism, Ireland and Civil War*, Cambridge UP, 2009.  
 Baldick, Chris, *The Modern Movement* (The Oxford English Literary History Vol. 10, 1910 – 1940),  
 Oxford UP, 2004.  
 Cahalan, James M., *The Irish Novel: A Critical History*, Gill and Macmillan, 1988.  
 Christensen, Lis, *Elizabeth Bowen: The Later Fiction*, Museum Tusulanum Press, 2001.  
 Corcoran, Neil, *Elizabeth Bowen: The Enforced Return*, Oxford UP, 2004.  
 Craig, Patricia, *Elizabeth Bowen*, Penguin Books, 1986.  
 Cusick, Christine, *Out of the Earth: Ecocritical Readings of Irish Texts*, Cork UP, 2010.  
 Dooley, Terence, *The Big Houses and Landed Estates of Ireland: A Research Guide*,  
 Four Courts Press, 2007.  
 Ellmann, Maud, *Elizabeth Bowen: The Shadow Across the Page*, Edinburgh UP, 2003.  
 Foster, R. F., *The Irish Story: Telling Tales and Making It Up in Ireland*, Oxford UP, 2002.  
 ———, *Luck and the Irish: A Brief History of Change from 1970*, Oxford UP, 2008.



- Genet, Jacqueline (ed.), *The Big House in Ireland: Reality and Representation*,  
Brandon, and Barnes & Noble, 1991.
- Glendinning, Victoria, *Elizabeth Bowen: A Biography*, Anchor Books, 1977.
- Halperin, John, "The Good Tiger: Elizabeth Bowen," *Eminent Georgians: King George V*,  
*Elizabeth Bowen, St John Philby and Nancy Astor*, Macmillan, 1995.
- Hildebidle, John, *Five Irish Writers: The Errand of Keeping Alive*, Harvard UP, 1989.
- Hoogland, Renee C., *Elizabeth Bowen: A Reputation in Writing*, New York UP, 1994.
- Humble, Nicola, *The Feminine Middlebrow Novel, 1920s to 1950s: Class, Domesticity*,  
*and Bohemianism*, Oxford UP, 2001.
- Ingman, Heather, *Twentieth-Century Fiction by Irish Women: Nation and Gender*, Ashgate, 1988.
- Jeffares, A. Norman, *Anglo-Irish Literature*, Gill and Macmillan, 1982.
- Jordan, Heather Bryant, *How Will the Heart Endure: Elizabeth Bowen and the Landscape of War*,  
Michigan UP, 1992.
- Kenny, Kevin, *Ireland and the British Empire*, Oxford UP, 2004.
- Lane, Jack et al. (ed.), *Elizabeth Bowen: More of her Espionage Reports from Ireland*  
*to Winston Churchill*, Aubane Historical Society, 2009.
- Lee, Hermione, *Elizabeth Bowen*, Vintage, 1999.
- Osborn, Susan, *Elizabeth Bowen: New Critical Perspectives*, Cork UP, 2009.
- Walshe, Eibhear (ed.), *Elizabeth Bowen* (Irish Writers in their Time), Irish Academic Press, 2009.
- Walshe, Eibhear (ed.), *Elizabeth Bowen Remembered: The Farahy Addresses*,  
Four Court Press, 1998.
- Weekes, Ann Owens, *Irish Women Writers: An Uncharted Tradition*, Kentucky UP, 1990.
- Wilson Foster, John, *The Cambridge Companion to the Irish Novel*, Cambridge UP, 2006.

# Life-illusion and Disharmony in Elizabeth Bowen: Caught between Ireland and England

Ikuko Mizunoe

*Love's Civil War*, published in 2008, consists of letters and diaries written during the 30-year love affair of Elizabeth Bowen and Charles Ritchie. Elizabeth, already a well-known Anglo-Irish 'writer of sensibility,' was married when they first met in 1941. Charles, a Canadian diplomat placed in London, got married some years later, and progressed at work to subsequently become Ambassador to the United States and to the United Nations.

Such a high-powered couple's extra-marital relationship was sustained mainly by constantly writing to each other. They were never together for more than a week at a time, or more than a few times a year. In particular the letters Elizabeth wrote reveal her heart about their love, their friends, her problems with money, about literature and politics—virtually everything that she felt and thought. Naturally the book aroused strong interest among specialists of Bowen, and of Anglo-Irish literature. Long review articles were written in both *TLS* and in *LRB*. In view of the recent rediscovered appreciation of Elizabeth Bowen, this book is bound to be analyzed from many different viewpoints. My aim is to examine it from the perspective of her Anglo-Irishness.

The word 'Anglo-Irish' may now be considered an anachronism in itself. Elizabeth Bowen, however, seems to have always been conscious of this aspect. One critic points out her 'wish to out-English the English by being impassibly fashionable and correct.' In any case 'the dilemma of being Irish in England and English in Ireland' influenced her life and work tremendously. When the background of rebellion and war is taken into account as well, the layers of complexity grow. The purpose of my short paper is to explore how this aspect of Bowen helped to produce 'disharmony' seen through the experiences of loss and betrayal described in her works as well as what Charles Ritchie called her 'life-illusion.'